

メキシコまでやって来た。

ここまで来るのに結構なお金と時間が掛かる。キューバはさらにその先だ。パタゴニアも遠かったが、やはりキューバも日本からとても遠い国だ。

アメリカがキューバを経済封鎖しているので、アメリカからは直接キューバへ入る事は出来ない。メキシコへは大抵アメリカを経由するので、キューバだけに興味がある人にとってはやっかいな遠回りである。

首都メキシコシティからキューバの首都のハバナ行きチケットを購入すべく、メキシコシティに来てから旅行代理店を何軒も回ったのだが、格安チケットが全く無い事を思い知らされた。

この路線は、メキシカーナとクバーナエアーという2つの飛行機会社しか通っておらず、寡占的な市場で、高めに設定しているという事をここで知ったのだ。



またキューバには、安宿というのが存在しない。安っぽい宿は幾らでもあるのだが、政府が、外国人を

泊める民宿を許可制にして、月額で数百ドルを徴収しているらしい。結果としてそれが宿泊費に跳ね返り、たいした設備が無い宿でも一泊20ドル以上するらしいのだ。

だから結局、<往復航空券>+<空港~ホテル間の送迎>+<ホテル7泊>というパッケージを、7万円近く出して購入せざるを得なかった。メキシコまでも安くないのに、さらに痛い出費である。

ハンガリーからチュニジア行きのツアーの時とはえらい違いだ。その時は、上記に加え、毎日夕食までついて3万円だったのに。

因みに、悔しい事だが、同じパッケージを二人で参加すれば、合計9万円程度で済むらしい。これならメキシコ人でも比較的気軽にキューバに行けるみたいだ。

キューバの概要

- 1.面積： 110,922km² (本州の約半分)
- 2.人口： 1,121万人 (2001年キューバ企画省)
- 3.首都： ハバナ (219.0万人)
- 4.人種： ヨーロッパ系 25%、混血 50%、アフリカ系 25% (推定)
- 5.言語： スペイン語
- 6.宗教： 宗教は原則として自由
- 7.略史： 1898年 米西戦争
1902年 独立
1959年 カストロ政権成立 (キューバ革命)
1962年 キューバ危機



野球場へ行こう

キューバへ行く目的は、私の場合、何といても野球なのである。

ロンリープラネットによると、10月3月までレギュラーシーズン、4月にプレーオフと書いてある。だから4月を選んだ。

ところがハバナに来てみると、現在キューバでは、日本で言う国体みたいな国のナショナルオリンピックをやっているそうで、野球の会場はハバナから遠くはなれた場所だというのだ。

一試合くらいはハバナでやると思っていたのに、全く試合の予定は無いという。うかつだった…。

野球見物の醍醐味は、やはりバックネット裏である。そんな席は、日本ではなかなか手に入らないので、もしかしてキューバでは毎日でも可能かも思っていたのに…。

パッケージなので移動もできないのだった。

仕方なくテレビでの観戦となったのだが、何せ国体開催中なので競技数が多い。

野球が国技なんじゃないのか！ と叫びたくなるくらい野球の放映が少ないのだ。

野球と並んでレベルの高いボクシングやバレーボールの他、サッカー、ビーチバレー、バスケット、テニス、フェンシング、シンクロナイズドスイミングさらには柔道、空手まである。

私が滞在している時には、次々にあらゆる種目の決勝が行われているようだった。

地域ごとの参加らしいのだがメダル数も競っていて、どれだけ金、銀、銅を取ったかが一覧表で毎日テレビに出る。

何故かキューバの試合に、メキシコ、エクアドル、チリ、コロンビア等々という名前がある。ホテルのスタッフに聞いてみると、何でもキューバの大会に各国の選手を招待しているのだそうだ。変わった国体になる気がするが…。

まあ、そういう事で、野球を見る機会がなかなか無いので、こうなったら草野球に参加するのみである。アテネオリンピックの前に、キューバ国民に対して日本の実力を見せておかねばならない。

今度はホテルで野球場の場所を聞く。

週末ならいつも草野球が行われるというので、野球が出来る格好をして、早速タクシーに乗って行ってみることに。

球場は海岸に近い所にあった。観客席が少しあるだけの、まあ日本でも公園にあるような野球場だ。

しかし…、誰もいないではないか。

土曜の昼、天気も良い。この最高の時間に誰も野球をやっていない事にショックを受けた。一体どうしたんだろう。

人がいないのではない。テニスをやっている連中がいるではないか。野球場に併設して、プールやバスケットゴール、テニスコートがあるのだが、テニスコートで遊んでいる高校生がたくさん

いる。壁打ちのコーナーまであって、そこでも中学生が練習している。数十人もいる。おい、キューバの子供たちよ、野球はどうした野球は。鍵が掛かっている野球場にも入れない。

打ちひしがれて野球場を後にする。
せめて思い出にキューバのグローブを買い求める事にした。
ホテルに戻り聞いてみると、以外にもほとんどが輸入品だと言う。啞然。
キューバにも牛ぐらいいるだろうに。
「しかし、じゃあどうやって子供たちはグローブを買うのか」と聞くと、
あっさり、「配給だよ」と言う。
配給で賄えない分は、メキシコ辺りで安いものを買ってくるとも言っていた。

ただし、しつこく聞くと、実は【BATOS】ブランドの国産品があるというのだ。
野球はアメリカで誕生したというのが定説だが、実はコロンブスが1492年にキューバに来た時に、野球の原形となるゲーム【BATOS】が現地人の間で行われていたという。
そして、その名前が現在でも野球用品のブランドとして生きている。何て素晴らしい話なんだ。自分のお土産にぴったり。
だから、野球の国キューバに来た証として、この【BATOS】を探す事にした。

繁華街に行き、スポーツ用品店に入ってみる。グローブを見せてもらおうと、何とミズノ。値段は72.5ドル。まいった。
その後も何件ものお店に入ってみたが、あるのはウイルソンだったり、名も無い中国製品だったり、ついに【BATOS】にはお目にかからなかった。とほほ....

ただ、街を練り歩くうちに、ようやく草野球をしている場面に出会うようになった。
ただし、参加するにはさすがに気が引けるような環境でやっている。

例えば、国会議事堂の脇の空き地である(というか、国会議事堂の敷地のちょっとしたスペースである)。

こんな首都のど真ん中で草野球をやっても良いのだろうかという場所だ。

当然ながら電灯や景観の木々が野球を難しくしている。

投手のすぐ脇には一本の椰子が立っているし、1塁ベースも椰子の木だ。外野の一部は柵もあれば歩道もある。さらにスペースの関係から、ダイヤモンドは細長くいびつな形になっている。回りは観光客が歩いている。

それでも少年達は実に楽しんでやっていた。



障害物だらけの場所で野球をやってしまうたくまさが凄い。イレギュラーなんてものも少ない。

草野球の数々を見ると、一般にグローブは守備の人数分だけあるようだが、バットが手作りなのだった。いや作るというよりは、ただの棒キレの場合が多い。

この国ではバットがいつも不足している気がする。まともなやつはほとんどみた事がない。エラーして転がってきたボールを拾ってあげたが、へんてこな固いボールだった。これも手作りかもしれない。

きっと配給のバットは、このボールや石などによってボコボコにされてしまうからではなからうか。



どこからか拾い出してきた細い棒キレをバットに仕立て野球をしている。ボールも小さい。あれで良く打てると感心した。

お土産屋さんでようやくバットを見つけた。

念願の【BATOS】ではなくて、木を粗くバット状に削ったような代物で、申し訳なさそうに“Cuba”と刻印してある(いや、“刻印”は大袈裟だ。Cubaと焼いてあるだけだ)。

打つと折れるのかもしれないが、一応本物の長さで重さである。歩くだけでは運動不足になるので、ホテルの部屋で毎日素振りをする事にした。

値段は因みに4ドルである。

キューバの通貨

キューバには3通りの通貨がある。

キューバペソ

米ドル

ドルの兌換通貨

現在1米ドルは26キューバペソで、これは両替所で外国人も交換できるのだが、ガイドブックには「観光に関するものの支払いはすべてドル」と書いてある。

ドルで買い物をすると、お釣のコインは間違いなく兌換通貨である。米ドルのコインはキューバでは使えないのだ。

一方、お釣の紙幣は米ドルの場合あるし、兌換通貨の紙幣の場合もある。

兌換通貨はキューバ国内ではドルと同様に使えるが、一步キューバを出ると、ただのゴミになってしまうので、5ドルもの兌換通貨紙幣を渡されようものなら、ランプのババをひいた気分になるのだった。

観光客はドルを使用する訳だが、キューバ人はドルとペソを使い分けている。

ドルショップでは、電化製品や高級品の他、水、ビール、お菓子、ソーセージといった食料、洗剤やコップという様な生活必需品など、いろいろなものが置いてある。これらは全てドル払い。

一方で食料品、野菜や肉、道端で売っているサンドイッチやアイスクリーム、ジュースといったものはペソで購入できるようだ。この他にペソ払いの食堂もある。そしてそれらのものは凄く安い。

食堂での昼飯を例にとると、ドル払いの場合は5~10ドルの食事、1ドルの飲み物という店が多いが、ペソ払いの場合は3~30ペソ(0.12~1.2ドル)の食事、1ペソ(0.04ドル)の飲み物という店が多い。もちろん出てくる内容が違うのだが、基本的に、はっきり言って味にたいした違いはない。でもってその味も、実はたいしたことはない(後述)。

話がそれだが、旅行者が、ペソ払いの環境に入り込んでしまえば、無茶苦茶節約できるのであった。

キューバの食事

お土産屋さんが100軒近く集まっているマーケットへ行った。

その食堂に入る。注文しているのはみな現地の人間だ。

これだけ汚くて、蠅が飛んでいると、観光客は寄りつかないというところだろう。

皆がおいしそうに食べているものを頼む。屑米にアズキをいれて炊いたような紫の米の上に、豚肉の焼いたもの。そしてキャベツに芋だ。

キューバ飯は、一般に味が単調だと思う。暑い国の割には、何故か辛いものが一切無い。メキシコではあれほどチリを使用するのに、キューバでは全く見かけない。また塩辛さもそれほど強くない。

だからといって、胡椒もあまり使わない気がする。強いて言えば、使っているのはニンニクだろうか。



米と小豆で炊いたご飯。まるで赤飯みたいだ。そこに豚肉とイモとキャベツが乗る。キューバの定番料理らしい。

素材の味を生かすといえればそれまでだが、メキシコを経由した私としては、やはり不満だ。

そして醤油を数滴落とす(そうすると、日本人には結構いけるものに変身する)。

もしかすると、キューバでは塩を自分の好みで調節する様になっているのかもしれない。確かによく塩が置いてあった。

一方、オレンジジュースはむちゃくちゃ美味い。絞ってたてだ。このお店でも、奥の方で絞っているのが見える。それを冷やして出している。熱帯の国では、後で腹が痛くなるリスクを考えて、大抵は1杯で止めておくのだが、ここでは4杯も飲んでしまった。

支払いはペソである。ご飯は16ペソ(0.62ドル)。ジュースが1杯0.8ペソ(0.03ドル)だった。だから80円でおなかがいっぱい。

しかし、ここキューバでは一杯約4円。渋谷駅にあるフレッシュジュース屋だと確か240円。

この違い何なんだろう。

別の市場では、マンゴーを売っている。幾らかわからなかったが、20ペソを渡すと、大きなマンゴーを4つもくれた。1個20円ちょっとという計算になる。比べちゃ行けないがオーストラリアで売っていたマンゴーの10分の1だ。

この日、ペソ払いの環境をしみじみと実感したのだった。

キューバの人々

この国の人種構成は、白人66%、ムラート(黒人と白人の混血)21%、黒人12%、その他1%となっている(ロンリープラネットには、ムラート51%、白人37%、黒人11%と書いてあるが)。この数字、まずは信じられない。

私の知っているキューバは、野球選手やミュージシャンから、街角で葉巻をくわえる人まで、いわゆるアフリカ系の黒人というイメージである。近くのジャマイカやハイチだってそうだ。そして歴史的にもスペイン人がカリブを支配し、強制労働と疫病によって先住民を絶滅させてしまってから、代わりに大量のアフリカ黒人をこの地に連れてきたと高校で習った。だから白人が多数を占めているというのは信じられないのだ。

そしてさらに、現実にキューバにやってきて、首都のハバナを歩く限り、やはりこの数字は信じられない。黒人が多いのだ。

実は首都のハバナや港のある大都市では黒人の比率が高いそうだ。

一方、内陸では住民のほとんどがスペイン系の白人なのだという。そしてそこを訪れる観光客は少ないし、ニュースも少ない。その為に、イメージと現実のギャップがあるのだそうだ。

港から郊外に広がる農場はかつての奴隷農場だったし、港湾にも苛酷な労働に従事する人が必要だったからという歴史的背景があるらしい。



道端で土産物をうるおじいさん。私の頭の中にある典型的なキューバ人。葉巻がとてもお似合い

キューバでは、黒人に対する差別意識は極めて薄いと感じさせる。

子供から大人まで、白人と黒人が実に楽しく時をすごしている。一緒に野球をやったり、街角でおしゃべりをしていたり...。もちろん白人と黒人のカップルもいる。

恐らくはアングロサクソンよりも、スペイン人が比較的人種差別をしないという事と、そして何よりカストロの人種差別撤廃の効果だろう。

これは、アメリカ/フロリダでの話。

多くの人が信号を無視して道路を横断している。数十人いる中で有色人種は一人だけだった。白人警官達が目ざとくその男を見つけ、しょっぴいて罰金を申し渡す。

これは友人の実体験だが、そんな事はこのキューバでは有り得ない。フロリダは300キロも離れていないのだが。

キューバのテレビ

ホテルにはケーブルがひかれていて、CNNの他、いろいろな映画が見られるようになっている。地元キューバのテレビは、どうやら3チャンネルあるようだ。時々同じ番組が流れていたり、何故か昼間は放送していなかったり(さらには音が途切れたり、映像が途切れたり)でいろいろだが、番組の中身は社会主義っぽい内容が多い気がする(当然全てスペイン語)。

特に、スポーツと教育モノに力が入っているようだ。

コマーシャルは無く、番組予算も限られている様で、スペイン語教育の番組では、単語を紙に手書きで書いて、それをボードにテープで貼っているケースがあった。

その一方で、ある時は、1つのチャンネルではDNAの事を、1つはコンピューターによる分子設計の内容をやっていた(残りの1つはアニメだった)。

夜、日本のドラマを吹き替えで流れているのをみた。NHKの朝ドラではない気がするが、よく分からない。昭和初期のドラマの様だ。

以前はおしんをやっていて、80%近くの視聴率だったという噂だ。その時は、日本人と見るや「おしん、おしん」と声がかかったと聞く。

カストロさん

そのテレビでフィデル・カストロを見た。

何かの討論会で、丸く6人が座っている。

ところがほとんどの時間、カストロが話してしまっていた。司会者なんか小さくなりっぱなし。討論会になっていない。

このカストロという男、1926年生まれだから、もう78才になる。声はかすれ気味だったが、恐らくそれは葉巻の吸いすぎだろう。もうテレビでみる限り健康そのものという感じだ。

何でも彼には、何とかカストロという弟がいて、現在ナンバー2だという。仮に急に倒れても、誰かが病気に乗して革命という事にはならない様だ。



この写真、実は苦労した。フラッシュは光ってしまうから使えないが、一方で、カストロの動きが速すぎてぼけてしまうのだ。

しかしカストロさん、なかなか話すのが上手い。スペイン語が全くわからなくても、何だか彼が

理論的に、そして感情を込めて語っているのが分かる。若い頃には相当ハンサムだったそうだから、相当に民衆受けしたんだと思う。

意外だったのは、この奇妙な討論会で一人の將軍の様な人が、相当な気迫でカストロに意見を述べていた事だ。これは北朝鮮なんかとは違うところだろう。それをテレビで流すというものキューバが開かれた国という事がわかる。

いろいろな人にカストロの評判を聞いた。

ある青年の話。

カストロを好きかと聞くと、「ああ好きだ」と言う。ただし、取り巻きは大嫌い。取り巻きが彼の意志を捻じ曲げてしまっていると怒るように語る。

アメリカは好きかと聞くと、大嫌いと言う。おまけに、日本は何でイラクに派兵するんだとかなりの勢いで言われてしまった。

この青年、お土産屋の店員なのだが、きれいな英語を話すし、世界事情にも通じている。なかなかキューバもやるなあ。

あるおばちゃんの話。

カストロを好きかと聞くと、「うん、好きよ」と言ってから、「実は駄目」と密かに語り出す。

彼は若い頃は良かったが、もう年をとって全然駄目と言う。ゼーンゼン駄目と。

キューバ人は誰ももう生活が苦しくて苦しくて嫌気がさしているという。多くのモノはドルでしか買えないが、なかなかお金は貯まらない。貯まっても、5ドルあれば質素にする限り15日間生き延びる事が出来るので、そうそう無駄使いは出来ない。

自分もこうして土産物屋を長い事やっているが、それでも昔は国营企業で働いていた。でも職がなくなって今はここにいる。もうチョイスがないの。ここだって、毎月毎月たくさんのドル政府に払って、ようやく開店しているのよ、という話だった。

カリスマ性で人民を引き付けてきたカストロだが、経済の面ではあまり結果を出せておらず、回りの国が豊かになるにつれ、不満も渦巻いているようだ。

キューバの医療

何だか賑やかな場所があったので、市場かと思い門をくぐり入ってみた。最初は気づかなかったのだが、石膏を腕に巻いた人や眼帯をしている人がいてようやく気がついた。病院だったのだ。もちろん白衣や看護婦姿の人がいたのだが、キューバは、何故か白衣姿で街中を歩いている人が多い。

人口に占める医者割合は高い。キューバの医師1人当たりの人口は約200人という。日本は約600人だから3倍だ。

薬は有料らしいが、さすがに社会主義国、診察料・各種検査費はタダだそうだ。

キューバの医療技術は高いらしい。中南米一という話だ。外国から治療に来る患者も多いと言う。

さらに、現在は観光と医療を合体させビジネスもあるらしい。

あれだけ煙草や葉巻を吸う国民なのに、この医療大国が平均寿命 76 歳という長寿国キューバを支えているのかもしれない、と、ここまで書いてみたが...

もしかして、気性が楽天的だからかな？ 沖縄に通じるものがある気がする。

アメリカの経済封鎖

カストロの革命で、1959年に米国企業が所有していた膨大な土地を接収したり、1962年にキューバ危機があったりとアメリカとキューバの間には、多くの確執があるのだから、なかなか一概には言えないのだけれど、単なる観光者として言えば、

“ 大人がむきになって小犬をいじめている構図 ”
を感じる。

私の知る限り、アメリカはこんな法律を作っている。

キューバとの商取引を禁止する法律

商用目的でキューバに入国した船舶は、その後 6 ヶ月米国入国を禁止する法律(第三国による貿易の妨害)。

接収された米国資産を利用した企業は、米国人の損害賠償請求を可能とする法律(第三国による投資の牽制)

そもそもソ連崩壊で、キューバは外国市場の 8 割を失ったそうなので、その打撃は深刻だったのだろう。後半の 2 つの法律は、その後にアメリカが、“ 追い討ち ” をかけたものだ。

その対象のキューバ政府は、国際法における「genocide(大量虐殺)」に該当し、音のない原爆だと主張している。

但し、米国による対キューバ経済制裁の一部緩和措置はその後、何度か発表されている様で、アメリカからの食糧購入も開始されたいのだが、ドルショップに米国製品は見当たらなかった(多くはスペイン、カナダ、イタリアなどなど。ああそういえば、どこ製かわからないが、コカコーラは見かけた)。

ともかくそんな経緯があり、キューバ人は、生活が本当に苦しい。

道を歩けば、ぼろぼろの車の故障を直している場面に必ず出くわすし、訳の分からない順番待ちが多いし、モノはドルでしか買えないものが多い。

人々は、いつもに何かを直しているようにさえ見える。

聞けば医療大国なのに、薬や医療器具までも満足にないらしい。

携帯電話など全く見かけない。

コンピュータに触れる人はまだごく一部の人だけだ。

平日の昼だというのに、仕事が無く、暇そうにしている人も結構いる。

それでも最近は少し持ち直してきていて、数年前の一番ひどい時期をよく乗り切ったらしいのだが、この苦しい生活を乗り越えている理由の一つは、その人々の明るさにちがいない。

噂に違わず、何だか楽天的だ。

道でやっている大道芸にしても、まわりの観客を巻き込んで、実に楽しそうに盛り上げる。



これぞキューバ、というノリで芝居が進む。何言っただかさっぱりわからないが、分からないのに楽しかった。

ただ、気になるのは、社会資本の数々、特に住宅などは、過去の革命前の遺産に寄りかかっている様なところがある事だ。

これからどんどんその老朽化が進む中で、経済発展の方がスピードが速いとは必ずしも言えないところがある。

余談だが、たぶん3番目の米国法律に絡むのだろうが、『地球の歩き方』には「キューバ製品(特に葉巻)を持ってアメリカに入国すると没収されてしまう」と書かれているらしい。

別に麻薬じゃあるまいし、ここまでくると、単なる嫌がらせを通り越しているとは思えない。

没収した葉巻は、米国役人が一本一本を丁寧に焼却処分しているんじゃないだろうかと穿った見方をしてしまう。

(ただしインターネット情報によると、特にチェックされなかったとか、アメリカン航空機内でキューバの葉巻が売っていた、という情報があるのでよくわからず)。

キューバ系アメリカ人を除いて、アメリカ人はキューバを訪問すると5万ドルの罰金という法律があるそうだが、実際には、アメリカ人はその法律を無視してキューバに来ているようだ。

街を歩くと、たまにイギリスなまりではないきれいな英語を話している観光客がいる。

CNNでは、他の都市に並んで、HABANAの天気予報を流しているくらいだから、まあいいんだろうな....。

つづく